

【24 熊本フェリー】



熊本港沖の船上から(※双胴船のため、航跡の太い泡の帯は3本)

熊本フェリーでは、熊本港～島原港の航路上のあらゆる区間で“東面の雲仙岳”が眺望できます。本航路から見える雲仙岳は概ね左右対称で、鷲や鷹がこちらを向いて翼を広げているような、左右に長い裾野が特徴的です。火山島のような島原半島に刻々と近づいていく情景は、“ジュラシックパークの恐竜島に向かっていているようだ”と表現する人もいます。また、航路からは阿蘇山も眺望できることがあり、阿蘇山と雲仙岳の間の歴史的な大三角形(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることが可能です。

本航路は、国道 57 号線の一部に位置づけられていた三角島原フェリー(平成 18 年まで運航)の代替航路として、熊本方面と島原半島をつないでいます。この国道 57 号線は、もともと阿蘇くじゅう国立公園と雲仙天草国立公園をつなぐルートとして、別府観光の父・油屋熊八氏が提案した九州横断道路(別府市～くじゅう～阿蘇カルデラ～熊本市～雲仙～長崎市)の一部となっています。

九州を旅した江戸後期の多才な知識人・頼山陽(漢学者、歴史・文学・美術など多方面で活躍)は、佐賀・長崎・天草と巡りながら雲仙岳を漢詩に歌いましたが、天草から熊本に向かう船中では阿蘇山と雲仙岳が有明海をはさんで向かい合う様子を漢詩に歌っており、フェリーで追体験が可能です。また、本航路は、幕末に勝海舟・坂本龍馬の一行が江戸から長崎へ出張する際、豊後街道を通り、有明海を渡って雲仙岳山麓の街道を通り、長崎に到達する過程で採用した航路です。

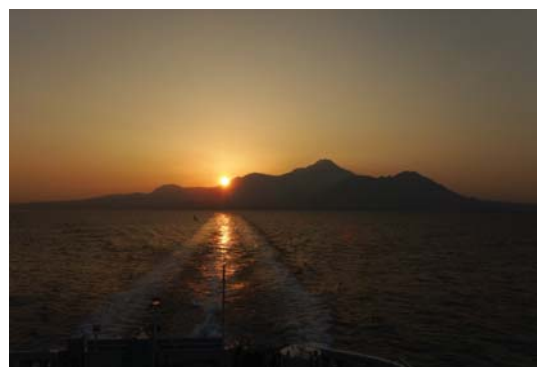
本航路では、イルカ的一种“スナメリ”が見られます。スナメリは、全国各地の干潟があるような浅い海に生息していて、有明海・橘湾では約 3000 頭が季節的に回遊しながら生息しているとされますが、波の静かな日にはフェリーから数頭のスナメリを発見できます。スナメリも多く生息する有明海の干潟は、全国一の規模を誇っていますが、その泥は、かつての阿蘇山の大噴火による噴出物を筑後川や菊池川、白川などが日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、雲仙岳そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、熊本フェリーで旅してみませんか？

●熊本フェリーの情報はこちら ⇒ 熊本フェリー株式会社 <http://www.kumamotoferry.co.jp/>



熊本港から



熊本港沖から